熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

ヒイロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

【Ｎコード】
Ｎ１５４４Ｚ

【作者名】
ヒイロ

【あらすじ】
不治の病にかかっていた少年が人体冷凍保存で未来へ・・・・
しかし、未来は過酷な世界になっていた。
少年はどのように生きていくのか！
アンドロイドあり、モンスターあり、そして男のあこがれ戦車あり！もちろん、ハーレムだって入れちゃいます！
果たして、少年はいちゃらぶできるのか！

プロローグ（前書き）

初めてなのでお手柔らかにお願いします。

プロローグ

西暦２１００年、在日米軍の度重なる不祥事に伴い
日本政府は在日米軍の排除を決定する。
これを受けてアメリカが抗議行動を行うが、
ある日本人の演説により反発運動が各地方で起こり、在日米軍を撤退させた。
撤退した基地は自衛隊の基地に再利用され軍事拡大を行うことに成功する。
在日米軍の排除を成し遂げる事ができた功労者の
「不知火　大蔵」が軍部の最高責任者へ就任を果たす。

この物語は「不知火　大蔵」の息子である
「不知火　和也」が織りなすファンタジー・・・なのかな・・・

雪がちらつきはじめている季節の
とある病室で医師からある病気の告知をされている家族がいた。
そう主人公の「不知火　和也」と両親である。

「あなたの病気は現代の科学では治療することができません。
また、これから治療を行える可能性は極めて低いと思います」
医師が沈痛な面持ちで話はじめた。
「息子は・・・息子は・・・まだ、１８なのに・・・」
和也の母「佐代子」が涙を流しながらつぶやく
「佐代子・・・」
大蔵が佐代子の肩に手をおき慰めように引き寄せる。
「父さん、母さん・・前からそうじゃないかと思っていたよ・・・」
ため息をつき、和也は話を続ける。
「大学を飛び級で卒業し大学院で博士号もとれた。

父さんの軍部で訓練と戦略、戦術も学ぶことができた。
濃密な人生だったと思う・・・それなりに良い人生だったよ・・」
明るい声で和也は話した
「和也・・・私は・・私は!!」
佐代子は興奮して話す。
「佐代子!落ち着きなさい!先生・・・家族だけにして頂けますか・・」
大蔵が佐代子に強く言いきかせる
「わかりました・・・私はナースステーション近くにいますので終わりましたら
お声をおかけ下さい」
医師はそういい、病室を出て行った
「和也・・・よく聞きなさい。佐代子も興奮せずに最後まで聞くように」
唐突に大蔵が語り始める
「私は軍部の最高責任者としてあるプロジェクトを行っている。
いわゆる人体冷凍保存といわれるものだ」
「和也の病気は現在の医療では治せない。しかし、未来で治せる可能性が
あるかもしれない。私はこれに掛けたいと思う。和也はどうしたい?」
和也は衝撃を受ける。確かに未来なら治せるかもしれない。でも・・
「父さん・・・それは確実に治るかはわからないよね?」
「確かに可能性は低いかもしれない。でも、0%ではない。どうせ治らないなら
かけてみてはどうだろうか。佐代子はどうだろうか?」
「私は・・・私は・・・和也がずっと苦しむならば、それにかけたい・・・」
「母さん・・・・俺の為に考えてくれる両親がいて本当にうれしいよ。

分かった！父さん、俺もそれで生きることにかけたい！」
「わかった。先生には伝えておく。後で軍部のものがある施設に運ぶから
そこで行おう！準備は大丈夫か？」
「俺はいつでも平気だよ！」
「では、ずぐに手配を行う！佐代子は先生に連絡を」
「わかりました。先生には私から話を通します」
大蔵と佐代子は急いで病室を出て行った。

病室に静寂が訪れたのもつかの間・・・ノックの音が聞こえる
「どうぞ・・・」
和也はノックを聞いて答えた
「失礼します。軍部から参りました、斉藤　正治と申します。
すぐに移動を開始したいんですが大丈夫でしょうか」
「俺は構いません。持っていくものもないですし、服もこのままで良いのならば」
「問題ありません。では、ご案内します」
病室から病院の出口へと歩き始める。
「これから移動する場所は特殊施設になりますので
関係者以外は入れません。施設のものには触れないでください」
「わかりました。ここから近いのでしょうか」
「はい、入り口で専用の車があります。そこで投薬を行います」
「わかりました。」
病院の入り口に着くと大きなワゴン車が止まっていた。
「どうぞ、お乗りください」
正治はそういい、車の扉を開けて和也を中へ促した。
「わかりました。宜しくお願い致します」
和也は車に乗りこむと
「ああ、そうでした。これが例の薬です。水は横にあるので、お飲みください」

「あ、わかりました。では・・・」
和也は薬を服用し・・・そして意識がなくなった

プロローグ（後書き）

メタルサーガなどの設定が入りますが・・似ている世界観と設定と思っています。また、更新などは遅いと思います。要塞は・・・次の予定です。

第1話「目覚めたら美女？」（前書き）

すみません・・・要塞までいけませんでした。
まあ、ヒロインは出せたのでお許しいただければ・・・

第1話「目覚めたら美女？」

コッコッコッコッコッコッ・・・・・
無人の廊下を靴の音が響く。
「やっと完成しました・・・
これがあればマスターのご病気も治ります」
ロングの赤い髪をしたスタイルの良い美女がつぶやく。
「しかし・・・思ったよりも時間がかかってしまいました。
早く人体冷凍保存室に向かい蘇生を行いませんと」
コッコッコッコッコッコッ・・・・・
「ここまで広いと急ぐときは困り者ですね・・・
何か手を考えませんと・・マスターにご負担をかけてしまうかもしれません」
コッコッコッコッコッコッ・・・・・
「あ、ここです。毎日、寝顔を覗いていましたから、
場所は絶対に忘れません。ああ・・・とうとう・・・うふふふふ」
人体冷凍保存室とプレートに書かれている部屋の前で
美女が怪しい微笑を浮かべる
「では、失礼します。マスター」
プシューと音がしてドアが自動で開く。
そこには大きい部屋にも関わらず
部屋の中央に一つだけガラス製のカプセルが安置されている
「マスター、お目覚めの時間ですよ」
美女はガラス製のカプセルに近づくと中を覗き込む
「マスター、お待たせしました。もうすぐですよ」
ガラス製のカプセル近くにある透明なプレートに手をかざして
何かを入力し始める。
「さあ、マスター・・・」
ガラスのカプセルから白い冷気が噴出し

静かに・・・静かにカプセルが開いていく。
「愛しのマスター、お目覚めください」
美女が怪しい微笑を浮かべガラス製のカプセルを見つめた。

カプセルが全て開ききったと同時に男性が目を開いた。
「えっ・・ここは・・・」
男は目を覚まし上半身を起こした
「おはようございます。マスター」
「えっ、き、君はいったい・・・」
美女の突然の挨拶に男性は驚きながら話す。
「申し訳ございません。私の名前はＣＩＰ－９９型と申します。
和也様でよろしいでしょうか」
「えっ？確かに俺は和也だけど・・どういうこと？？」
「私はアンドロイドです」
「あ、あああ、アンドロイド？？えっと人間ではないということ
かな？
どこからどう見ても、人間しか見えないんだけど・・・」
和也がＣＩＰ－９９型を頭の先から足までを見る
「はい、私はアンドロイドで間違いありません。
ですが感情回路が組み込まれておりますので
ほぼ人間と変わりはありません」
「えっ、感情回路？？」
「はい、人間と同じように喜怒哀楽ができるように組み込まれた回
路です」
「でも、データ通りに動くだけでは・・・」
「いえ、データーに基づいて表現されるわけではなく、
人との生活でつかさどったものとなります」
「なるほど・・・ってそれなら違うところはあるのかな？」
「人間と違うところですね。子供を生む事ができない事と
身体能力や知性、記憶力などになります。戦略・戦術・戦闘など

人ではできない行動を行う事が可能です」
「なるほど・・・でも、その名前じゃ呼びにくいよね・・・
ＣＩＰ－９９型ってさ・・・愛称とかはないのかな？」
「マスター、申し訳ございません。私にはそのようなものはありません。
「そうなんだ・・・では、俺がつけてよいかな？」
「マスターが名前を下さるんですね。お願いいたします」
「では・・・うーーん、アテネなんてどうだろう？」
「アテネですか・・・わかりました。これからアテネと名乗らせて頂きます」
アテネからピーピーと機械音がなる。
「な、なんだ・・・」
「名前を頂きましたでマスター登録を行います。大変申し訳ございませんが
マスターの粘膜を頂きたいと思います」
「え？？どういうこ・・・」
和也が話している途中でアテネが突然顔をよせキスを行う
「ななな・・・なに！！！？？」
「粘膜登録を完了しました。正式にマスター登録完了です」
「え、あ、へ・・・」
「突然で申し訳ございません。正式に登録を行うには
粘膜登録を行う必要がありました。キスが一番早く行えますので」
「そ、そうなんだ。で、でも、キスなんていきなり・・その・・」
「マスターとキスを行うのに躊躇なんてありませんよ。
マスターは和也様だけですから」
「そ、そうか・・でも、びっくりするからさ」
「わかりました。今度からマスターに確認をとりキスを行いますね」
アテネが怪しく微笑んだ
「い、いやそうじゃなくて・・って、そうだ！聞きたいことがあるんだけど・・・」

「はい、なんでしょうか？マスター」
「あ、その前に、マスターは俺だけってどういうことかな？」
「それはマスターがマスターだからです」
「え？どういうこと？」
「それに関しましては、マスターの病気の治療を行ってからでもよろしいでしょうか」
「あ、ということは俺の病気が治るようになったということかな？」
「はい、こちらを投薬すれば完治します。まずはこちらをお飲みになった後に
詳しいご説明を行いたいんですがよろしいでしょうか」
「わかった・・これで病気は治るのか。父さん、母さん、賭けにはどうやら勝てたらしいよ」
和也はそうつぶやきアテネから薬を受け取り飲んだ
「マスターその薬は即効性なので飲んですぐに効果がでると思います。
ですが、難点は眠くなる事です」
「え・・・ああ・・・だから・・・」
和也は薬を服用し・・・そしてまた意識がなくなった
「お休みなさいませ・・・マスター・・」
アテネが怪しく微笑んだ

第1話「目覚めたら美女？」（後書き）

ふむ・・・なんかよく意識がなくなる主人公になってしまいました・・・

誤字とかあるかもしれませんが気にしないでいただけるとありがたいです。

１２／６　修正

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」（前書き）

要塞の事は出せたんだけど、説明まではいけなかった・・・

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」

「う・・む・・・」
大きなベットで寝ている和也が寝返りをうった
「マスター・・・お目覚めですか？」
「う・・・えっ・・・あ・・・夢ではなかったのか・・・」
和也は目を開きまわりを見渡した
「マスター・・夢から覚めていないのですか？
でしたら、目覚めのキスが必要ですね」
アテネは怪しい微笑を浮かべながら和也の顔を近づけて・・・
「のわ！！！ア、アテネ！！起きた！！起きたから！！
もう大丈夫だよ！！ほら！目が覚めているからこんな事できる！！」
あわてて和也はベットから起き上がりジャンプしはじめる。
「チィ・・・そうですか。おはようございます。
マスター、体の調子はどうでしょうか」
「えっ、今、舌打ちしなかった？？」
「何のことでしょうか。マスター・・耳は大丈夫でしょうか。
やはり精密検査を行いませんと。解剖とか必要でしょうか」
「か、解剖！！いやいやいや！！俺は元気だよ！！まだ起きたばかりだから
寝ぼけていただけだよ！！うんうん、そうだよ！きっと！！」
「そうでしたか。では、精密検査は今度にしますね」
アテネは怪しい微笑を浮かべる。
「今度・・・いやいや、精密検査は良いから！本当に！！」
「分かりました。問題ないようでしたら良いのです。
ところで、体の調子は大丈夫でしょうか？」
「ああ、体のだるさなど特にないね・・・問題ないと思うよ」
和也は腕を動かしたら首を動かしたりして答えた
「そうですか。見た限りでは問題なさそうですね。

では、マスター大変申し訳ございませんが
脈を取らせて頂いてもよろしいでしょうか」
「ああ、問題ないよ。お願い」
アテネは和也の手をとり、脈を確認する
「マスターの脈を見る限りでは、健康そうですね・・・」
アテネは笑顔を和也に向けると同時に和也の手を自分の方に引っ張る
「のわ！！な、なにするん・・・」
アテネは和也の唇を自分の唇と合わせ、キスを行う
「う・・・んん・・・マスター、ご馳走様です。健康そのものです」
「な！なんでアテネはキスをいきなりするんだ！！」
「もちろん、マスターと愛を・・健康を確認するためには粘膜を
調べる必要がありまして、申し訳ございません」
「えっ、今、愛をとかいわなかった？」
「マスター、やはり耳が・・・解剖の準備を行いませんと」
「いやいやいや、アテネ！申し訳ない！！空耳だった！！うん！！
空耳！！」
「そうですか・・・残念です・・・」
「アテネは俺を解剖したいのかい・・・勘弁してほしいんだけど・・
」
「マスターを解剖したいわけではありません。
全てを受け入れたいだけです。そう、マスターの全てを」
「え、え、え・・・ま、まあ、なんだ・・・そ、そうだ！！
ここは、いったいどこなんだい？」
「マスターに、ご説明を行っておりませんでしたね。
大変申し訳ございません。ここはヴィーナス内部、マスター専用室
となります」
「？？？ヴィーナス？？？」
和也はアテネのいわれたことが理解できなかった
「はい、マスター。超巨大移動要塞ヴィーナス、いわゆる軍事基地
です」

「軍事基地・・・つまり、父さんの関係なのかな??」
「はい、お父上である、大蔵様のご命令で完成された、
和也様の為の要塞となります」
「俺の為の??いったいどういう事なんだ・・・
父さんはどのように考えて俺にこのようなものを・・・
いやいや、考えても仕方ないか。聞いてみればわかる事だしね。
アテネ、父さんや母さんはどこにいるのかな?」
「大蔵様と佐代子様はお亡くなりになりました」
「えっ・・・どういう事・・・父さんと母さんが亡くなったなんて・・
嘘でしょう・・・アテネ・・・」
和也はショックを受けつつもアテネに聞き返した
「申し訳ございません。大蔵様と佐代子様はお亡くなったのは真実でございます」
アテネは悲しそうに和也の質問に答えてた
「そんな・・・じゃあ・・・俺はどれぐらい眠っていたの??」
唖然としつつアテネに質問を返す
「マスターが人体冷凍保存をされてから２０００年ほど立っております。
現在は西暦４１００年となります」
「は??え・・・つまり、俺は２０００年眠っていて、
そこまで薬が開発できなかったということかな??」
和也は唖然とした表情でアテネに問いかける
「はい、正確には薬の開発が行えない状態が続きまして、
開発自体を後手にまわさないといけませんでした」
「開発が後手に・・・つまりイレギュラーな出来事が起こったと言う事か・・」
「はい、マスターのご想像通り、ある出来事が起きたために
後手にまわさないといけませんでした」
「ある出来事か・・・それは気になるな。

アテネ、いったいどんな事が起きたんだい？」
「それは・・・・」
アテネは２０００年の間に起きた
驚くべき事実を語り始めようと口を開いた・・・

第2話「俺は一体どこにいるんだ？」（後書き）

次回は和也の寝ている間に起こってた事。
しかし、和也のいちゃらぶまで長い・・・
早くハーレムにしたいのにな・・・

第3話「寝てる間になにがあった？」（前書き）

ふむ・・・説明は難しいですね・・・
分子とかは流してくださいね・・・

第3話「寝てる間になにがあった？」

「マスターが人体冷凍保存をされてからすぐでしょうか」
アテネは前置きのように言いはじめ続ける
「マスターもご存じのとおり、地球温暖化問題で
二酸化炭素をどのように削減できるかを
各国の代表が集まり会議を行っておりました。
しかし、削減の重要性をいくら訴えても
中国がそれを許さず、自国の要望のみを言い
まったく協力を行いませんでした」
アテネはため息を吐きながら続けた。
「しかし、日本人研究者『栗林　悟』氏が
ある研究を発表しました事により、
新エネルギーが開発されました」
明るい声でアテネが話す
「新エネルギー？それって温暖化と、なにか関係あるの？」
和也はアテネに問いかけた
「はい、これは二酸化炭素を使用したエネルギーです。
二酸化炭素を一つの器（コア）に閉じ込め
分子の活動を促すことによってエネルギーを発生させます。
詳しく説明を加えますとこのエネルギーは分子を
電気信号により活動を促し少しの信号で莫大なエネルギーを
生み出す事に成功しました」
アテネは一度話を切る。
「このエネルギーの開発により二酸化炭素の活用法が生まれ
大量に二酸化炭素のみを取り出す事で地球温暖化の抑制につながり
ました」
「なるほど・・・二酸化炭素のみ・・・酸素は外にだすのか・・」
「はい、この画期的なエネルギーの開発で地球温暖化を抑制する事

に成功しました」
ここでアテネは和也と目をいっそう合わせる
「栗林氏の研究で発見されたエネルギーであるこれを
『永久ドライブ・栗林』通称『ＥＤＫ』となずけられました。
これにより全てのエネルギーを
ＥＤＫに切り替える事が各首脳会議で決定されました」
アテネは下を向いて話し続ける
「しかし、安易に永久的にエネルギーを生み出すことができる
ＥＤＫが開発された事により、各国で利権争いが勃発する事になり
ました。
また、この時期に以前から進められていたアンドロイド開発の目処
が尽き、
エネルギーを小型化できるＥＤＫを搭載させる事で起動に成功しま
した」
アテネが笑顔を浮かべた
「しかし、アンドロイド開発が成功したことで
大規模な世界戦争が行えるようになり
各国でアンドロイド同士での戦争が行われるようになりました」
「そんな中でアンドロイドを大量にかつ遠隔に操作する為に
アメリカの研究者リスティンが発明した
アンドロイド遠隔装置と人工知能を兼ね備えた、
ジャスティスが発明されました。
ジャスティスの導入により、アメリカが一挙に戦闘地域を広げる事
に成功します」
アテネは悲しそうな声を出しながら続ける
「アメリカはさらに戦闘地域を広げようとアンドロイド達の総括シ
ステムである
ジャスティスに命令を下したところ
ジャスティスがその判断を否定し独自の行動を行いました」
「ジャスティンは人間がいるかぎり地球は守られないと

判断を下し、アンドロイドたちに人間を攻撃するように
命令を下しました。そうです・・・暴走を始めたのです」
「ジャスティスを破壊する為にアメリカ軍部が動き攻撃を始めました
たが
人型アンドロイド以外に殺人マシン・バイオ兵器・生体兵器などを
ジャスティンが開発し生産し始め、それを使い抵抗をしはじめた為、
アメリカ軍部の作戦攻撃が失敗に終わりました」
「ジャステスはこれを機に衛星を通じて
各首脳国のコンピュータに侵入、コピーを行い
地球上の人間に対して攻撃をはじめました」
「この暴走により人類の５０％が死に絶え
生き残れた人類はジャスティスに侵入されていない
コンピューターや兵器を使用し、
なんとか拠点になる生存圏を守る事ができました」
「その拠点であるシティを安全に行き来できるように
また、ジャスティスが生産している敵に対抗するために
ハンター協会が設立されました」
「ハンター協会か・・・どこでもあるのかな？
というか・・・ゲームみたいな・・・」
「はい、そうです。確かにゲームみたいですが真実です。
ハンター協会は各シティにありますが、
主に護衛やモンスター・危険性が高いモンスターに賞金を
かけてそれを討伐する事でゴールドを得る仕事となります」
「なるほどね・・・」
「以上が世界情勢となります。現在はハンター協会で
シティは守られていますが、いつジャスティスが
動くかわからない状態です」
「ジャスティスか・・・なるほど・・・流れは大体わかったんだけど
肝心の今乗っているヴィーナスの事が語られていないんだけど」
「もちろん、これからですよ。マスター、せっかちは女性にはモテ

ませんよ」
「ほっといてくれ！」
アテネは微笑を浮かべヴィーナスの事を語り始めようとさらに話を続けようと口を開いた

第3話「寝てる間になにがあった？」（後書き）

世界情勢はかけたかな・・・
つぎはやっと要塞だ！！
ヴィーナス！！はやく・・・ハーレムにしたい・・・
１２／８　修正

第４話「要塞でかくない？」（前書き）

なんとかかけた・・・

第４話「要塞でかくない？」

「では、超巨大移動要塞ヴィーナスに関してのご説明をいたしますね」
アテネは笑顔で話しかける
「おお・・・やっとか・・・」
「お待たせしまして申し訳ございません。
まずはマスターがなぜここにいるかの説明からさせて頂きます」
「病院から出た後にマスターはすぐに
このヴィーナスに運ばれて処置を行いました」
「えっ、薬を飲んで意識がなくなった後にかな？」
「はい、そうです。もともとヴィーナスと人体冷凍保存の開発は
佐代子様の指揮のもと行われていました」
「・・・母さんの・・」
「そうです。人体冷凍保存技術はすでに開発を完了しておりましたが
超巨大移動要塞ヴィーナスはコア部分などの
重要部分のみしか完成しておりませんでした」
「しかし、マスターのご病気が現在の医学では
治療を行える可能性は極めて低いと判明した事をきっかけに
急遽、人体冷凍保存室の完成を先行して行う事を決定しました」
「つまり、そこに俺が入ったということかな？」
「はい、その通りです。ヴィーナス内部に
人体冷凍保存室を設置を最優先し、内部の開発は
全ての処置が終了した後に行う予定に変更されました」
「また、人体冷凍保存室の制御と管理、
超巨大移動要塞ヴィーナス開発の指揮と
マスターの護衛を行う為に
日本で初めて開発されたアンドロイドである私が配備されました」
「なるほど、アテネが・・・」

「人体冷凍保存の処置が終了した後に
停止していた超巨大移動要塞ヴィーナスの開発を再開しましたが
ジャスティスの暴走により開発を一時中断し
大蔵様と佐代子様は迎撃と指揮を行うために出立されました」
「父さんや母さんは戦いに出たのか・・・父さんたちは生き残ったのかな？」
「大蔵様と佐代子様の指揮のおかげで日本人はかなりの数、
生き残ることができたそうです。ただ・・・・・」
「ただ・・・やはり、父さんや母さんは・・・死んでしまったんですね・・・」
「はい・・・敵の数が多く、自衛隊だけでは民衆を逃がす事で
精一杯だったようです・・・」
「そうなんだ・・・でも、父さんと母さんらしいよね・・・」
和也は下を向いて悲しそうな声を出した
「でも・・・なぜ、この要塞は大きいのかな？重要部分しか
開発できていなかったはずなんじゃ・・・」
「それはですね、私が設計図を基に
姉妹アンドロイドを指揮し完成を行いました」
アテネは嬉しそうに答えた
「あれ？？でも、ジャステスがアンドロイドを統括していたのでは・・」
和也は疑問を口にした
「それに関しましては感情回路を組み込む事で
アンドロイドが独自の判断が行える為に
外部からアクセスされる事がありませんでした」
「ジャスティスは外部システムを通って制御を行う為、
感情回路が組み込まれていますと統括されることもありません」
「もちろん、姉妹アンドロイドとヴィーナスにも感情回路が
組み込まれている為、制御されることはありません」
「なるほどね・・・・感情回路ってすごいんだね・・・」

「はい、このシステムは佐代子様が開発したものです」
「母さんってすごかったんだな・・・」
「この感情回路は戦争にアンドロイドを利用するのではなく
人間と共に生きてほしいと願いを込めて開発されたそうです」
「母さんらしいや・・・」
「私も感情回路があるおかげでマスターと
このように楽しく話せるのでとても嬉しいです」
「アテネ・・・俺もアテネと話せて嬉しいよ」
「マスター・・・このときめきは愛でしょうか！今すぐキスをしません！！
いや、ベットへ！！」
アテネは体をくねらせ、大きな胸で谷間をつくりながら和也へにじり寄って行く
「ちょ！！アテネ！！興奮しすぎ！！落ち着いて！！！」
「私はすごーく落ち着いております！！」
「まったく落ち着いてるように見えないよ！！深呼吸して！！
まだ、ヴィーナス内部の説明とか聞いてないし！！」
「そのような事は後でで！！」
「いやいや、アテネ！！先に！！先にお願い！！」
「そうですか・・・仕方ありません・・・何がお聞きになりたいのですか？」
「ヴィーナス内部に関してだよ・・・」
和也は冷や汗を拭きながら答えた
「わかりました。では、超巨大移動要塞ヴィーナス内部の説明を行います」
「ヴィーナス内には、開発フロアー、農耕フロアー、
住居フロアー、操舵フロアーなどフロアー別に分かれております」
「まずは開発フロアーですがこちらは兵器から家電まで全て自動で生産されます。
また、アンドロイドやＥＤＫの生産もそこで行われます。

ジャスティスに対抗する為に色々作られていると考えて頂ければ問題ありません」
「なるほどね・・・」
「次に農業フロアーですね。こちらは字のごとく野菜や動物の飼育などが行われています。
私たちアンドロイドには関係ありませんが
マスターの食事が生産されていると考えてください」
「食料品がそこで作られているのか・・・」
「次は住居フロアーですね。このエリアーでは
最大５万人まで収容することが可能です。
要塞ですので戦う為の兵士もこのエリアで生活することになります」
「そうか、要塞だもんな」
「つぎは操舵フロアーですね。このエリアーは
ヴィーナスの制御室などが含まれます。
字のごとくなのでわかりやすいかと思います」
「確かにね・・・しかし、結構大きいね・・・エリアー自体はこれで終わりかな？」
「いえ、細かい部分ではまだありますが、
たとえば、倉庫や戦車などを止める場所などがあります。
ですが、大まかに分けると以上となります」
「なるほど・・・でかすぎだね・・・なんか迷いそうだな」
「マスターが迷うことはありません。私がいつも一緒にいますので」
「えっ、いつも??」
「はい、いつもです。どこでもです。どこまでもです！」
「そ、そう・・・」
「では要塞の説明も終わった事ですし・・・そろそろ・・・」
アテネは体をくねらせ、大きな胸で谷間をつくりながら和也へにじり寄って行く
「え、え、え、！なんで寄って来てるの！！」
「マスター・・・分かってるくせに・・・」

笑顔でアテネが寄って来る
「えっ、え・・・え!!!」
「ふふふふふ・・・」
アテネがさらによってきて・・・そして和也と重なった・・・

第４話「要塞でかくない？」（後書き）

なんか、難しいですね・・・
アテネがどんどん変になってきた・・・肉食系かな・・・
捕食された和也はハーレムを作れるのか・・・

第5話「やっと部屋からでるのか？」（前書き）

ふむ・・・実はまだ和也専用室から出ていなかった・・・
いつになったら外の世界へいけるのかと
思ってますよ・・・・

第5話「やっと部屋からでるのか？」

窓から緩やかな光が和也の顔を照らす
「う・・・うん・・朝か・・。は！俺は昨日・・・」
自分の服装を確認する和也
「服に乱れはないか・・良かった・・・」
和也は安堵のため息をはく
「おはようございます。マスター」
和也の隣で声をかけられる
「へ？？」
驚いた声を和也は出す
「どうしましたか？マスター？」
「い、いや、なんでもないよ。
ところで何で隣で寝てるの？それに昨日は・・・」
おどおどしながら和也はアテネを見た
「昨日ですか？はぁ・・・」
アテネは呆れてため息を吐く
「せっかくマスターと結ばれようと頑張ったんですが・・・
マスターが・・・気絶するって・・・へタレすぎますよ」
アテネは残念そうに話した
「し、仕方ないじゃないか！そ、そんな事経験ないんだから！
ずっと、研究や軍事訓練ばかりやってきたんだからさ！」
興奮しながら和也は話した
「でも、確かマスターには女性の幼馴染がいらっしゃいましたよね？
幼馴染と色々経験していたはずなのではないのですか？
朝一番に幼馴染が起こしに来てキスをしたり、
ご飯は全て口元にあーんして食べさせてもらったり、
マスターが幼馴染の着替えている途中でいきなり部屋に入ってきたり、

色々なイベントを経験しているはずなんですが・・・。
昨日は恥ずかしかっただけなのでしょうか」
アテネは当たり前のように和也に問いかけた
「何を言ってるんだ！！そんな事があるわけないじゃないか！！
どこからそんな話がでてくるんだ！！」
「そうなんですか・・・でも、この本に・・・」
アテネは胸の谷間から本を取り出す
「ど、どこから出すんだよ！それに何その本！
『幼馴染との付き合い方～入門編～』って！
嘘だから！！そんな話はまったくない！！
というか何でそんな本を持っているんだ！！」
和也は興奮しながらまくし立てた
「佐代子様が参考資料にとおっしゃられまして
乙女の禁書保管室にたくさんあります」
「母さんが・・・・というか何を考えているんだ！！
そんな本は全て捨てなさい！！」
呆れ果てて和也は話す
「申し訳ございません。いくらマスターのご命令でも
佐代子様のご指示により参考資料はトップシークレット（禁書）は
処分できません。
他の姉妹アンドロイドも参考資料をもとにデータを入れてありますし
また、マスターでも乙女の禁書保管室がある場所には入室すること
ができません」
アテネはきっぱりと和也に言う
「なんでだ？？俺の為の要塞じゃないの？？」
「佐代子様によれば『乙女の秘密には男性は入れないのよ』との事
です」
「母さん・・・乙女って・・・いや、それよりも処分できないとか・
・・
いやいや、そうじゃなくて・・・」

和也はぶつぶつ一人で話し続ける
「マスター、大丈夫ですか？顔色が悪いようですが？」
「いや、アテネのせいでしょ？！」
私のせいですか？よく分かりませんが
大変申し訳ございません。
さて、マスター、そろそろ操舵フロアーへご案内したいのですが」
アテネは首をかしげた後に話した
「えっ、あ、そうなんだ。わかった。行こうか」
和也は正気に戻って答えた
「はい、ご案内したいと思います。
あ、そうでした、こちらをお渡ししますね」
アテネは腕時計のようなもの和也に渡した
「これは、一体なんなのかな？」
和也はいきなり渡された腕時計を疑問に思いながら腕にはめた
「これは、マスターの現在位置や生命維持確認などが
自動的にヴィーナスへ転送され確認できるようになっております」
「俺が監視されているってかな？」
「いえ、それは違います。マスターの安全を確認するために
必要な処置だと思ってください。ジャスティス対策でもありますので」
「なるほどね・・・・」
「もしも、ヴィーナス内で迷った際は青いボタンを押してください。
その装置から地図が表示され行きたい場所へ誘導する事が可能です。
ご利用ください」
「なるほど・・・広いからね・・・」
「はい、ヴィーナスはいまだ開発が続けられ、拡張されております。
私はマスターと離れることはありえない事ですが、
迷われた際は必ずこれをご使用ください。
また、その装置はマスターの認証が登録されている為
他の方が使用することができません」

「なるほど、盗難防止かな??」
「はい、ヴィーナスに敵が侵入を行う際に使用されると困りますので」
「なるほど、わかった。
そういえば青いボタンの隣に赤いボタンがあるけど、これはなにかな?」
「赤いボタンは緊急事態に用のものです。
常に自動的にヴィーナスへ転送されておりますが
敵に遭遇した際の対応ができないかもしれません。
それを防ぐ為の緊急ボタンとなります。
マスターの緊急事態時に押してください!
マスターのもとに誰よりも早く駆けつけます!!
そう!私の愛はマスターだけの物ですので!!」
アテネは和也に詰め寄るように答えた。
「そ、そうか、あ、ありがとう。そういえば、外の様子はどうなっているんだろう」
和也は忘れていた事を思い出し外の様子をアテネにたずねた
「ヴィーナスの前方がガラス張りになっております、
前方部分に操舵フロアーがあります。
そちらへ来ていただければ今現在の外の様子が分かります」
「なるほど、では案内をお願いしても良いかな?」
「はい、ご案内します。離れないようについてきてくださいね」
「あの・・・俺は子供じゃないから大丈夫だよ・・・」
「ふふふ、そうですね。では、行きましょう」
アテネは楽しそうに和也の腕を組んで歩こうとした。
「え!い、いきなり、どうしたの??」
和也はびっくりして組んでいる腕をはずそうとしたが
アテネの力が強くてはずすことができない。
「マスターがはぐれない様に腕を組んでいきましょうね。
それとも迷子になってミイラになりたいのですか?」

アテネは怪しい微笑を浮かた
「わ、わかったよ・・・」
和也は恥ずかしそうにしながら
和也専用室を後にして
操舵フロアーへと移動をはじめた

第5話「やっと部屋からでるのか？」（後書き）

やっと次回で外の現状が見れます。
まあ、その前に新キャラを出すつもりです。
ハーレムだから出さないとね。
アテネは和也を虜にできるか。
それとも新キャラにもっていかれるか！
それとも作者である私が頭が爆発して暴走するか。
乞うご期待！！

第5話「操舵フロアーはまだなの？」（前書き）

昨日はすみません。
それと新キャラは出せませんでした。
新キャラの紹介のみになってます。

第5話「操舵フロアーはまだなの？」

操舵フロアーへ移動しながら和也はアテネに話しかけた
「そういえば、アテネがさっき話していたと思うんだけど
ヴィーナスに感情回路がついているんだよね？」
思い出したように和也がアテネに確認をとった
「はい、ヴィーナスは私が開発された後、
どのフロアーよりも先に開発され組み込まれました。
今まで要塞への感情回路を組み込むという概念がなかった為、
開発と各部門の説得が相当大変でだったそうです。
また、開発や予算捻出でも横槍が入るなど
ヴィーナス自体の研究も遅延したそうで。
しかし、佐代子様がヴィーナスに
感情回路を組み込むことを強く推進しておりましたので
強引に開発を進めてヴィーナスに組み込まれることに成功しました」
「母さんは、そこまで感情回路に拘ったのは何か理由があるのかな？」
「佐代子様は『要塞を争いや戦争だけに使用したくはない。
要塞だって何かをしてみたいと感じたり、
行動してみたいって思っても良いじゃない』とおっしゃっておりました」
「なるほどね・・・要塞だって色々と感情を持ってもって事か・・
戦争や争い事の道具で終わるのはもったいないよね・・・
本当に母さんらしい考えだよな・・・」
しみじみ和也は話した
「佐代子様はとてもお優しい方でした・・・
私も感情回路があり、とても良かったと心から思います」
「そっか、そう思ってくれているのか。
アテネ、ありがとう。母さんも喜んでいるよ。

しかし、アテネがすごく良い子なんだから
ヴィーナスもきっと良い子なんだろうね」
しみじみ和也は話した
「マスター、私は良い子ではなくアンドロイドです。
人間ではないので良い子はおかしいのではないでしょうか」
「俺からしたらアテネは人間そのものだよ。
喜怒哀楽があり心がある以上
アテネは誰がなんと言おうと俺と同じ、人間だよ」
和也はアテネの目を見ながら訴えるように話しかけた
「マスター・・・ありがとうございます。
その様に面と向かって愛の告白をしていただきして大変嬉しいです。
マスターお部屋に戻ってベットインしたくなりました。
今すぐに、部屋に戻りましょう!!ええ!!今すぐに!!」
アテネは興奮して和也に話す
「な、なにを言ってるんだよ!!あ、愛の告白って!!
俺はアテネは人間だっていっただけだよ!!
落ち着いて!!ね!!アテネ!!お願いだからさ!!」
和也は慌てて、アテネを説得する
「しかし、あのように情熱的に目を合わせて訴えかけられたらたら、
その様にしか思えません。マスターの告白されるなんて・・・」
アテネはうっとりしながらつぶやく
「アテネ、落ち着いてね。深呼吸をしようね」
和也はアテネを落ち着かせようと背中に手を当てて促した
「ああ・・・マスター・・抱きしめていただけるんですね・・」
アテネは熱にうなされたように顔を赤らめて和也を見つめる
「ち、違うよ!!落ち着いて!!操舵フロアーへ行って
外の様子が知りたいからさ!!お願い!!アテネ!!戻ってきて!
!」
さらに慌てて和也はアテネに訴えかけた
「マスター・・・仕方ありませんね・・では、『あとで』お願いい

たします」
アテネは顔を赤らめながら和也に訴えた
「へ？後で？？いやいや、あとでとかそういうのではなくてね・・・
えっと、とにかくその・・・あの・・・
ま、まだ、操舵フロアーにはつかないのかな？？」
慌てながら和也はアテネに尋ねた
「もうすぐつくはずですよ。操舵フロアーに
ヴィーナスのアンドロイドが待機しているはずです」
淡々とアテネは答えた
「お、怒ってるのかな・・・」
和也は小さい声で言う
「私は怒ってなどいませんよ」
アテネは怪しい微笑を浮かべて答えた
「そ、そう・・・な、なら良いんだけどさ。
そういえばヴィーナスのアンドロイドは
どのような感じの子なのかな？？」
和也は疑問に思うことをアテネに聞いてみた
「そうですね・・・会って頂ければ
お分かりになると思いますが
ヴィーナスはよく『超巨大移動要塞ヴィーナスは大きいから
管理も大変だよ～」とよくぼやいております。」
アテネは和也に答えた
「なるほど・・・確かにこれだけ広いと大変だよね。
それぞれのフロアーに行くまでにも時間がかかるしさ」
和也は歩いている道のりを見ながら答えた
「確かにマスターは大変かもしれません。
私達アンドロイドはバーストを使えば
速度アップを行えますのでフロアー移動も苦にはなりません」
アテネは笑顔で答えた
「そうなんだ、速度アップすれば確かに早くつくよね。

なんとか、俺でも使えるような
早く着くよものってないのかな？
これじゃあ、アテネに迷惑をかけちゃうしね」
和也はアテネにというかけた
「私はまったく、これっぽっちも迷惑なんて思えませんよ。
マスターと一緒にいるのは私にとって心の安らぎですから」
アテネは笑顔で答えた
「ありがとう。すごく嬉しいよ。
アテネにそういってもらえるのは嬉しいけど
やはり、なんとかしてほしいかもな」
困り顔で答えた
「そうですね・・・エレベーター自体はありますが
廊下部分ではまったく対応されておりません。
それに関しましてはこれからの課題ですね。
マスターがお目覚めになりましたので
気がついたことがあれば、私におっしゃってください。
できうる限り対応させて頂きたいと思います」
アテネは和也に優しく話しかけた
「アテネ・・・本当にあいがとう。頼りにしているよ」
和也は笑顔で答えた
「マスターのお力になるのが私の役目です。
マスターに付き従い、どんな事でもご命令ください！
もちろん、添い寝も・・・それ以上も・・・」
アテネは怪しい微笑を浮かた
「そ、それ以上って！！いや、ないよ！！そんな命令しないよ！！
や、やはり愛し合ってこそできる事だからね！！」
慌てて和也が否定した
「マスター・・・私はマスターを心から愛してますよ。
マスターは私が嫌いですが？」
アテネは上目遣いで涙を浮かべ和也に問いかける

「お、俺はアテネのことは嫌いじゃないよ！！嫌いじゃないから
涙を浮かべるのはやめて！！！」
和也はドキドキしながら答えた
「嫌いじゃない・・・好きって事ですね。嬉しいです」
アテネは怪しい微笑を浮かべた
「い、いや・・・あの・・・その・・・
あ！！ドアが見えてきたけど、あそこがそうかな？？」
和也はごまかすように答えた
「チィ・・・はい、あそこから操舵フロアーとなります」
悔しそうにアテネは答えた
「今、舌打ちしたような・・・」
和也はつぶやいた
「マスター・・耳は大丈夫でしょうか。
やはり解剖しましょうか・・・」
アテネは和也をみながら答える
「い、いや！！気のせいだよ！！うん！！気のせい！！
ほら、早く行こうよ！！ね！！」
和也はドアへ走っていく
「あ、マスター！！待ってください！！」
操舵フロアーのドアの前についた
「では、マスターからどうぞ」
アテネは和也に先に入るように促した
「では、アテネ。先に入るね」
プシューと音がして操舵フロアーのドアが開き
和也とアテネは中にはいっていった

第5話「操舵フロアーはまだなの？」（後書き）

ああ・・・新キャラ出せなかった。
ただ、出すフラグは立てたから
次回では出せそうです。
感想がありますと
モチベーションがあがるのでよろしくお願いします

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1544z/

熱砂の超巨大移動要塞ヴィーナス

2011年12月11日22時54分発行